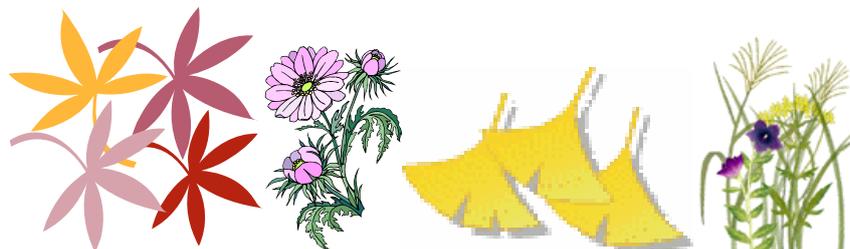


# 茅ヶ崎 自然の新聞



18年11月号(274号)

【編集・発行】

茅ヶ崎市文化資料館

〒253-0055

茅ヶ崎市中海岸2-2-18

TEL&FAX: 0467-85-1733

MAIL: shiryokan@city.c

higasaki.kanagawa.jp

資料館へのメール



## 自然観察会「初秋の清水谷を歩く」を開催

9月30日(土)、市内堤の清水谷をフィールドに、「初秋の清水谷を歩く」と題し、自然観察会を開催いたしました。

清水谷は、多種多様な自然が観察できる、市内でも貴重なフィールドです。

今回は17名の方が参加しました。天気やタイミングにも恵まれ、ツリフネソウの群落をはじめ、ナンバンギセル、オオアオイトトンボなどの多くの初秋の動植物を観察することができました。

開催に際し、文化資料館と活動する会(自然部会)や市民ボランティアの方にガイドの協力をしていただきました。ありがとうございました。(文化資料館)

写真: イヌビワを観察(左上)、木道を歩く(左下)、ツリフネソウ(右上)、フジカンゾウ(右下)



## 夏休み自然教室 顕微鏡コーナー!

今年は、身近な生物ということで、資料館の庭で採集したコケ、シダ、微生物、イヌビワの実(果のう)を観察しました。

◎**コケ** ツクシナギゴケ、ジャゴケ、ギンゴケ、キャラボクゴケを観察しました。子供達よりもお父さん、お母さんの方が、拡大された未知の世界に感動していたようでした。

◎**シダ** イヌワラビ、イノデの胞子のう群を観察しました。拡大された胞子のうがちょうど虫のように見えるので、気持ち悪がるお母さんもいたようでした。

◎**微生物** 去年まで指導していただいた斉藤先生が今年はいらっしゃれないので、心配していましたが、ここ何年か先生のお手伝いをしてきた中学生の方たちが立派に役を果たしてくれました。やはり子供達は微生物のように動くものに引きつけられるようでした。

◎**イヌビワの実** 毎年自然教室の頃になると、文化資料館の庭にあるイヌビワの雄株(イヌビワは雌雄異株)の果のうがふくらみ、中にイヌビワと共生するイヌビワコバチが見られます。今年も果のうを割ってみると小さなイヌビワコバチが多数入っていました。双眼実体顕微鏡で見ると、先に雌花から羽化した羽のない雄のイヌビワコバチが、子房内で羽化したばかりの雌のイヌビワコバチに交尾器を差し込んでいました。この後、雄は外の世界を知らずに命が尽き、雌は花粉をつけて果のうの外に飛び立ちます。

また別のイヌビワの果のうには、イヌビワコバチに寄生するイヌビワオナゴコバチも見られました。羽と長い産卵管を持ったイヌビワコバチの幼虫の入った子房に産卵管を差し込んで幼虫に卵を産み付けます。

この直径1.5センチ程の小さな果のうの中で、食物連鎖の一端を見る思いがしました。

(東海岸南 石井準子)

## チョウトンボとコムクドリ

8月15日、小出川沿いを歩いていると、20数羽のコムクドリが対岸の樹木を移動しながら飛翔している。ムクドリより一回り小さく、<sup>くちばし</sup>嘴と足が黒い。キュルキュルとよく鳴き、双眼鏡で見ていると雄と雌の区別がよく分かる。

しばらく見ていると、真向かいの目の上、1メートルの高さから、モンシロチョウぐらいの黒っぽい<sup>はね</sup>翅をした一頭のチョウが飛んでくる。ちょっと形の違うそのチョウを目で追った。小さな池のアシに止まったので、見に行くと、鮮やかなブルーの色をした雄のチョウトンボだった。

おもわずデジカメで2、3枚シャッターを押した。カメラのファインダーから<sup>のぞ</sup>覗く、チョウトンボは光の差す加減で、翅は青紫に輝き、胴体が金青紫にピカピカと光り、その綺麗に感動すら覚えた。ちょっと翅を休めたチョウトンボは、西の方面へ高く飛んでいった。

8月に入って、西久保の田んぼに、雄雌のチョウトンボが発見されていた。

8月12日に、やはり西久保の田んぼのそばで、1頭の雌のチョウトンボを数人で見ていた。だがその時には、樹木の上で飛翔していたため、雌の黒い翅がわずかに、ヒラヒラしているのを見ただけだった。

かつては茅ヶ崎でよく見られたチョウトンボ、やはり自然の回復があって、こうした生き物たちが戻ってきてくれることを、祈らずにられない。

(香川 目黒啓子)

*Sturnus*



コムクドリ  
全長 19cm

### 平成18年の台風13号

9月14日、午前9時の天気図によると、台風13号は北緯20度、東経130度の西に発生していた。そこは台湾とバターン諸島の東であった。

ところが西経のハリケーンが日付変更線を越え、台風の名を変えて関東の海岸寄りを通っていた。

台湾東南方に発生した台風は、その後台湾の東で北上し、沖縄を通り、九州の西から佐世保に上陸し、北九州市の西を日本海に抜け、隠岐の西を通り、19日朝に勢力は弱まり時速10Kmとなり、更に北に偏西風に乗り北海道に渡って行った。

14日には955ヘクトパスカルであった。17日には沖縄石垣島をおそい、沖縄本島の西を北上した。

16日夜から方向をやや東に向け、西表島では最大風速69.9mに達し、宮古島で北北東に進み当時の気圧は925ヘクトパスカル、最大風速50mであった。

そして北北東に進み、17日午後6時に長崎県佐世保に上陸した。当時の風速は35m、日豊本線では特急が延岡で突風らしき強風にあおられ脱線し、30余人の乗客の中、5人がケガをしている。運転士は強風のため速度を弱めたという。またテレビでは、強風のため「家にいる人は外出はしないように」と危険信号を出していた。

各地の風速は五島市で53.4m、佐賀市で50m、福岡市で45.9m、雲仙台で58.1m、山口県で42m、徳島で32m、隠岐の郷郡で34.8mであった。当時の勢力は950ヘクトパスカル、風速40m、時速35Kmである。

交通機関はすべて運休であり、ケガ人は276人、死者9人、行方不明1人であった。死者は室内にあった荷物が倒れたり、商品棚の下敷きになったりして亡くなった人である。電柱が二つ折れになったり、土砂流にあたり、消防団員が行方不明になった。

18日には日本海へ抜けたが、まだ島根県は強風の余波が続き、隠岐では24.8m、浜田では32.2mであった。

19日には北海道奥尻島西を通過し、20日に北海道北部に上陸する模様である。まだ台風であって温帯低気圧にはなっていない。

また19日には別の台風14号がマリアナ付近に発生し、西に進んでいる様子である。

(若松町 樋田豊宏)

## 小出川の花ごよみ

4月18日、ジャヤナギの新緑の若葉が目優しく映る季節です。浜園橋から小出川の右岸印のついた草はヒメオドリコソウ、ムラサキケマン、カントウタンポポ、セイヨウタンポポ、ホトケノザ、ナズナ、オオイヌノフグリなどですが、タチイヌノフグリもこんなにあったのかと思うほど随所に見られました。

ヒメウズの可憐な花をこの土手で初めて見つけたり、キランソウが一面に咲いている場所があったのは嬉しい限りでした。今回初めて参加したFさんがヒメウズの果実の面白さを見つけてじっくり観察し、キランソウの別名「地獄の釜の蓋」の漢方との関わりの話に花を咲かせました。

「小出川に親しむ会」の会員であるTさんがカントウタンポポの株数をチェックし始めたので、セイヨウタンポポと混在しているカントウタンポポを数えました。遠目で直ぐカントウタンポポと分るものと、そうでないものもあります。菰園橋までで30株以上、左岸側で20株以上ありました。

優しい小さな花をつけているキュウリグサとハナイバナを見比べたり、スイバの雌花と雄花をルーペで見て、色だけでなく形も違うことを確認したりと楽しい時間でした。

河川改修において多自然型を考慮したとされる土手には、セイヨウカラシナの黄色い花が一面に広がっていました。

木では浜園橋近くの岸辺にあるオニグルミの花序が目立っていました。長いものは10cmほども長さのものもあり、「雌花は何処にあるのかしら」と探していると、ちょうど土手に座って見られる高さに数株ほど咲いていて、ルーペでゆっくり観察できました。エノキとムクノキの違いも、小さな若い葉でも確認でき

ることや、葉の形を図鑑と見比べながら「これはジャヤナギで大丈夫よね」と話しながら歩きました。

昆虫では、ツマキチョウ、モンシロチョウ、キタテハ、クロアゲハ、ナミテントウなどがいました。オニグルミ付近には尾を長く下げて飛んでいる全体が黒い虫や、葉の上で交尾している名前の分らない虫が多く見られました。

水鳥では、昨日は居たというシマアジは見当たらず、ハシビロガモの雌が1羽、バンの成鳥が1羽、カルガモが20羽以上、コガモが多数いました。空にはヒバリが明るくさえずり、ツバメも飛び交い、ツグミも数羽見ました。外歩きの一番良い季節を大いに満喫した時間でした。

(浜之郷 河野正子)

※ 手違いにより、本記事の掲載が遅れましたことお詫びいたします。

## 9月の花ごよみ(柳島の海岸)

9月5日、快晴。真夏のような暑さ。日影を通るようにしながらも、いつも歩いている道を、いつもの4人、齋藤、石井、河野さんと私が観察して歩きました。キャンプ場へ曲がる角のサンゴジュの実赤くなり、もうだいぶ落ちていました。

キカラスウリ(カラスウリは、この辺には見当たりません)は、日が射しはじめると萎しぼんでしまうのですが、海岸の方には、まだだいぶ咲いていたようです。ここのキカラスウリはもう実をつけていました。今はピンポン玉より小さく、緑色でしたが、熟すと長さ10センチ程のカラスウリよりも丸味のある黄色の球になります。エビツルの葡萄状ぶどうじょうの実は、まだ小さく緑色(秋が深まれば黒緑色になり食べられます)。

隣にはノブドウの傘の形に開いた花序に蕾つぼみがついていて、なかなかきれいでした。ノブドウもブドウ科ですが、これ

は熟しても食べられません。

この辺はクズも多く、大きなクズの葉の影に、いく房か花を咲かせていました。よい香りです。花はマメの花で、旗弁の基部に目立つ黄斑があり、これは昆虫たちを呼ぶ蜜標です。豆は5~10センチにもなるのですが、まだ半分ぐらいの長さの豆が1房だけありました。今、食用のくず粉はなくなりましたが、漢方薬では葛根湯などに使われています。

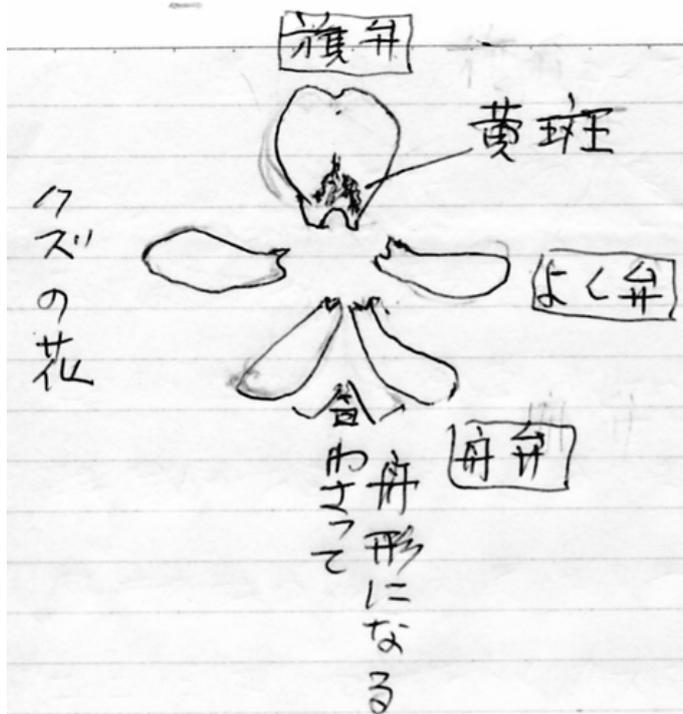
ヒヨドリジョウゴは全草やわらかな毛におおわれ、葉の形にも特徴があるのでよく分かりますが、ちょうど花をつけはじめていました。

ここにはハマサオトメカズラがあります。これは海岸性のヘクソカズラで、強い日光を跳ね返すため、葉に光沢があります。中心はやはり赤く小さなかわいい花をいくつつつけていました。

ここまで6種、皆つる草ですね。この道はつる植物が目につく道です。

帰り道、昼近く暑い中、ナガサキアゲハを5~6頭を見ました。

(東海岸南 吉田弥生)



## 白いヒガンバナ

我が家には、ヒガンバナとシロバナヒガンバナが、とても美しく咲いている。

毎年、不思議と秋の彼岸の中日の頃に咲く。田の畔に美しく赤く咲いている。

埼玉県高麗の巾着田は有名になっている。毎日何台ものバスが列をなして訪れている。近くでは伊勢原の日向薬師や、遠藤の老人会が中心に小出川に植えたのもある。茅ヶ崎では、芹沢の新道橋から西の方へ、追出橋にかけて、少し咲いている。川の土手のアシを切り、久保山の柿畑の下草に沢山あったものを移植したものである。

ヒガンバナは、田の畔に三々五々咲いている。この草花は、秋には軸が出て、赤い花を咲かせ、花が落ちると、葉が出て来る。そのため、冬の寒い時期になると青葉が出ている。

また、ヒガンバナとシロバナヒガンバナでは軸の色が違う。葉が細いのがヒガンバナで、軸の葉の巾が広く、真ん中に薄い白い線が入っているのが、シロバナヒガンバナである。

我が家には、シロバナヒガンバナが37株で100本ほど咲き、ヒガンバナが10株で40本ばかり咲いている。

シロバナヒガンバナは、根っこの周囲に球根がいくつもいくつも増える。そうになると来年は余り咲かない。株分けをしないと駄目である。その株分けが、初年は球根の3倍くらいで増えるか、深く植えると、地下で1年間上昇して、次の年に咲く。植え替えは少しむずかしい。

来年には、小出川の土手の曼珠沙華(ヒガンバナの別名)も美しくなるだろう。楽しみである。

(若松町 樋田豊宏)

## 小出川の花ごよみ

9月26日(火)、曇りのち雨。小雨が降りそうな朝でしたが、久しぶりの小出川です。何が待っていてくれるかと楽しみにしていました。7月には両側の雑草がたちはだかり歩きにくかった浜園橋から萩園橋の右岸を歩くことにしました。

今日はちゃんと道が見えていました。夏に草を刈って下さったのでしょうか。足もとにいつもの様にオオバコがずっと先まで1列に生えています。今日のオオバコはとても美しく見えました。長い穂に白い花を沢山つけています。ずっと歩いて行くと薄ピンクの花のオオバコもあります。川岸には、「わずか1ヶ月半位でよくもこんなに大きくなったなあ。」と思うほど大きな葉、太いツルで他をおおいかくす様に、クズやアレチウリの葉が広がっています。そのすきまから、多くの植物たちが競う様に顔をのぞかせています。

ゲンノショウコ、カラムシ、カナムグラ、ヒメシバ、ヤブツルアズキ(黄)、オキノゲシ、ノゲシ、エノキグサ、ハマスゲ、イヌビユ、イシミカワ(実)、オウチカタバミ、ハキダメギク、キンエノコロ、アカツメクサ、ヒメジョオン、イヌホウズキ、ハナタデ、ヤブガラシ、ツユクサ、ヨモギ、メドハギ、コヒルガオ等が咲いていました。

今日は、ヤマトシジミが沢山とびかっています。その幼虫の食草であるカタバミが生えている畑がまわりにたくさんあるせいでしょう。川岸と反対側の土手に小さな白い朝顔をみつけました。葉は丸いかんじです。マメアサガオだと思いましたが、ホシアサガオというのもあるので自信がありません。何年も小出川を歩いています。このあたりでこの種をみつけたのは初めてです。

小出川の秋の主演は、やはりヒガンバナだと思えます。燃える様な赤い花片が

優雅な曲線を描いて誇らしげに咲いているので、目に入らないという人はいないでしょう。ちょっと前までは、お墓のそばに咲いているから死人花と呼ばれたり、毒があるからおそろしいとか、あまり良い印象をもっていなかった人が多いと思います。私もその1人でした。最近では、私たちの暮らしにとっても役立っている事を知る人が多くなりました。畑の畦に植えておくと、草全体にアルカロイドという毒がふくまれているので、土の中のモグラやノネズミをよせつけなくして田の畦をこわされずに済んだり、葉から出る物質が田に生える雑草を生えにくくしたりしているとの事です。小出川の上流域には、ヒガンバナの群生しているところもあるようです。

この季節、ヒガンバナの様に華やかではないのですが、私の好きな花が咲きます。アキノノゲシです。うす黄色に咲いた花にやさしく秋風がとおりにぬけて少しゆれている姿にひかれます。

花に夢中になっていたら、突然ピーと鳴く声がきこえ、まさかと川面を見るとまさかのコガモです。9羽位かたまっていました。もう渡って来たのかと少々おどろきました。まだエクリプスの状態で雌雄はわかりませんでした。コガモは、春は遅くまで(5月頃まで)いて、秋は早々と渡って来るなんて、「遠いところを行ったり来たり大変だな。」と思いました。

小出川が、いつまでも渡鳥たちに十分な餌と居心地の良いねぐらを与えることのできる環境でありますように、と願わずにはいられません。

(円蔵 高橋静子)

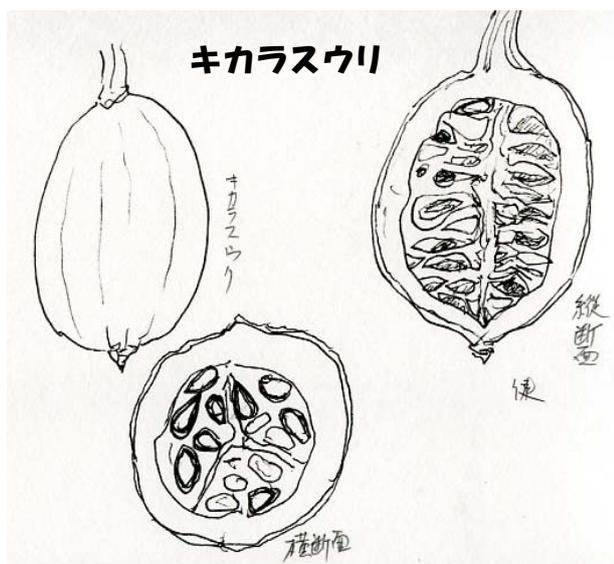


### 10月3日 柳島花ごよみ

今にも雨が降り出しそうな空模様を気にしながらの観察だった。先月、ほのかな香を漂わせたクズも、今は実全体に毛を被った枝豆のような様子になっていた。



キャンプ場の入口で数多いキカラスウリの実に出会い、秋の実の季節を実感する。今日は実を中心にした観察になる。



いちじくそっくりのイヌビワの実、ブドウの味のするエビヅルやヤマイモのム

カゴ、ヤマイモをすりおろした味よりも、煮たり、蒸したりと調理した味よりも、自然のヤマイモのムカゴが一番おいしいと、自然好きの仲間は秋の味覚を堪能する。

(東海岸 斎藤溢子)

### ヨトウムシ・ネギのさび・ツバキ

#### ●ヨトウムシ

ネギをヨトウムシに食われました。ネギ苗、タマネギの苗を育てているとき、その苗をヨトウムシに食われたことはありますが、定植して葉が30cmにも大きくなっているのに、葉を食われたのは初めてです。昆虫の図鑑を見ても、ヨトウムシの食害にあう主な植物の中にネギはありません。葉の先から20cmくらいまで食われてなくなっていました。

ネギの根元を掘ると丸々と太った、約3cmに育ったヨトウムシが丸くなって出てきます。

#### ●ネギのさび病

6月から7月にかけて植えたネギが勢いよく育ち、分けつして葉が混み合ってきた10月半ば、葉にさび色の点々がつき、葉全体に広がり葉が枯れました。

さび病は湿度が高いと出やすいのですが、今年の10月は長雨のあと晴天が続き乾燥していたと考えられるので、湿度だけのことではないのでしょうか。

#### ●ツバキの花、サザンカの花

10月に入って間もなく、一輪ずつ花が咲き出したツバキの木があります。30本近くある中で、その木だけに花が咲きました。また、ダイカグラという種類の八重ツバキも、今年は花をつけました。例年、正月を過ぎて花をつけ、霜で花びらがしおれています。また、例年、12月になって咲くサザンカが今満開です。どの木も何本かあるうちの1、2本だけが咲いているのに気がきました。

(文化資料館 池田卓郎)

## 小出川の花ごよみ

10月19日(木)、晴。秋日和のよい天気、気分爽快。浜園橋～菰園橋の上流あたりまで歩くつもりです。

歩きはじめてすぐに、ショッキングな事に出会ってしまいました。ずいぶん見晴らしがきくと思いましたが、それもそのはず。土手にあったクルミの木が根本から切りとられていました。土手に根づいた数少ない実生から立派に育った木です。つい1ヶ月前、クルミの実が付いているのを観察したばかりなのに・・・。子供達の観察会にも大切な教材になる木だったので、とても残念です。何故切らなければいけなかったのでしょうか。

土手を、約1.5mくらい下ったところにある木です。小出川をなるべく自然の形で残して行きたいと願っていました。すっかり気落ちしてしまいました。

気を取り直して、草花の咲き具合を調べました。そろそろ終りの時期をしめくく様に、セイタカアワダチソウが華やいています。水面近くにミゾソバの群生もあります。アキノエノコロクサ、キンエノコログサ、ムラサキエノコログサも若い実がついています。コセンダン草の黄色い頭状花もツツと伸びて可愛いですね。実になっているものもあり、散歩している人や犬にくつつくチャンスをとねらっています。ヨモギの花も、一見地味で茶色の房がたれ下がっている様子しか見えないのですが、虫めがねでもあまりはっきり見えません。今度機会があったら顕微鏡で見たいです。イシミカワのブルーの実美しいのですが、そっとながめているだけがよさそうです。茎にはトゲトゲがいっぱいで触れると痛いから。

ヤブツルアズキ、アキノノゲシ、ヒメジョオン、イヌタデ、ホソアオゲイトウ、イヌガラシ、ベニバナボロギク、カゼク

サ、ツククサ、セイヨウタンポポが咲き、オオオナモミも実がついていました。秋日和は、小さな生きものにとっても活動しやすいのでしょう。

ツチイナゴ、ショウリウバッタ、アキアカネ、ツマグロヒョウモン、モンシロチョウ、イソシギ、カルガモ、コガモ、バン、クイナ、カワラヒワ、モズ、カワウ(35羽)、クサガメなど、いろいろな生物に出会いました。

(円蔵 高橋静子)

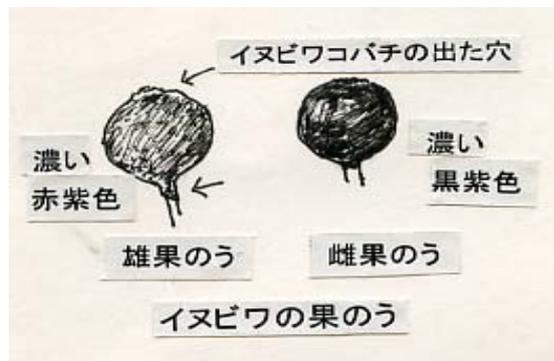
## 10月 柳島花ごよみ

斎藤・河野・石井の3人で出かけました。まず入口で目に入ったのがサンゴジュにからみついたキカラスウリ。9月の花ごよみでは、10時頃だったというのに、まだきれいに花が開いていました。ひと月たち、それらの花が直径7.8センチもあるボールのような果実になり、濃緑色から黄色までいくつもぶらさがっていました。これで雌株だったと判明しました。家へ持ち帰って割ってみると、外皮は濃緑色で、中の綿状のものはクリーム色、種子は中軸に向かって並んでいて、ちょうどゴーヤを丸くしたような形で、臭いもゴーヤに似ていました。

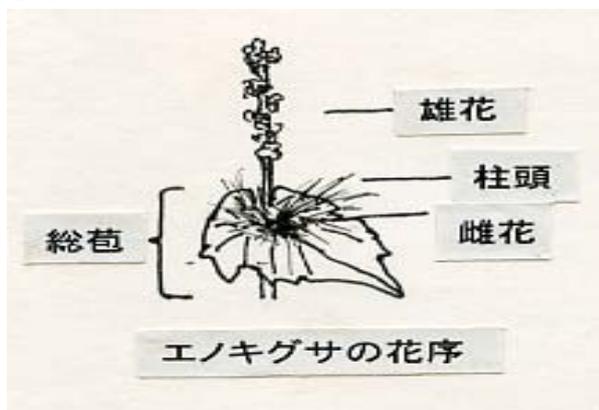
秋は果実の季節で、目立ったものだけでもモチノキ、ネズミモチ、シャリンバイ、ノブドウ、エビズル(食)、トウネズミモチ、トベラ、ヤブカラシ、オオバイボタ、アレチウリ、マサキ、ヨウシュヤマゴボウ、ヒヨドリジョウゴ、ヘクソカズラ、シロダモ、イヌビワ(食)、エノキグサ、ツルオオバマサキ、イシミカワなどが見られました。

柳島海岸で多く見られるイヌビワは沿海の樹ですが、ここのほとんどが黒紫色で、熟したおいしそうな雌果のうをつけていることから、雌株が多数を

占めているのを確認しました。(ちなみに、文化資料館の庭にあるイヌビワは雄株です。)雌株と雄株では果のうの色、形が少し違います。



斎藤さんが、「今年はいやにエノキグサが多いと思わない?」と言われたのですが、私も同感でした。我が家の庭にも今まで生えたことのないエノキグサが何本かできています。エノキグサは花序の形がおもしろく、受粉方法も変わっています。花序かしらの上方に雄花が穂状すいじょうにつき、基部に総苞そうほうに抱かれるように雄花がつきます。雄花は花粉をつけたまま花ごと総苞の中に落ちて、直接受粉するといひます。



しばらく行くと、センダングサが、最近急に広がり始めた帰化植物のコバノセンダングサ囲まれるように、1~2本だけ残っていました。こういう場合、コバノセンダングサを抜いてしまった方が良くないかいつも迷いますが、そのままにしておきました。キャンプ場内のセンダングサは、夏以外はほとんど人の出入りがないせいか、相変わらず元気よく数10株が健在でした。

キャンプ場の管理小屋の前にあるオオフタバムグラは、一面に真赤な草紅葉になっていました。フェンス沿いにあるハマビワは、いかにもクスノキ科らしい目立たない花をつけていました。図鑑では、ハマビワは山口県、島根県以南の沿海地に生えるとありますが、ここのは植栽されたものと思われます。茅ヶ崎は温暖なので耐えられるのでしょう。キャンプ場内では、鳥によって運ばれた種から数ヶ所育っています。

帰り道、水道記念館側の道路端に数本のヨシがあるのに気が付きました。この他にも記念館側には、今までメリケンガヤツリやママコシリヌグイ、イシミカワ等が見られました。乾燥しているように思われるこの環境には不釣り合いのようですが、斎藤さんによると、昔、この辺りに細流があったそうです。その頃の眠っていた種が芽吹いてきたのかも知れません。

(東海岸南 石井準子)

### 秋、野鳥の声でにぎやか

8月に矢畑地内にやってきたコムクドリは、9月の終りに姿を消す。多い日には30羽ほど観察をした。

10月に、矢畑地内の上空を100羽以上のヒヨドリの群が南へ飛んでいくのを3日ほど観察した。

10月30日は、ヒヨドリの群を写真に撮影し数の確認をした結果、最高で217羽をカウントした。この群は、大きな二つの群が合流して217羽の大群となり、西へ飛んで行った。

秋の柿畑は、野鳥の鳴き声でにぎやかです。居残り組みの数羽のヒヨドリは熟し柿にやってくる。実が沢山ある時より少なくなった時の方が仲間同士で「ピーヨ、ピーヨ」と鳴き声も大きい。

そこへ、ムクドリの数羽の群がヒヨドリを追い払う。おいしい熟し柿の奪い合いが始まる。食べ物の獲得順位関係もわかるような気がする。

10月30日正午頃には、20羽以上のメジロも追い払われる。6~7羽のオナガが「ギーイ、ギーイ」と鳴きながらやってくる。ハシブトガラスが太い嘴で実の付いた枝をパキッと折って持ち去る。遠くの方でモズも鳴いている。矢畑地内で、シジュウカラと混じって電線に止まるヤマガラを久しぶりに見た。ヤマガラも電線鳥の仲間入りである。今はこんな季節である。

(文化資料館 小室明彦)

### 市内で見かけた植物たち

本年、9~10月にかけて市内を歩いていたならば、珍しい花を2、3見かけました。

1) 10月にもかかわらず、朝顔らしき花がたくさん咲いていました。ただし、葉が朝顔の葉と違い、どちらかと云えばイモの葉そっくりで多少厚みがあります。花は全く濃紺でした。近所に花屋さんがあり、「あれは何と云う花ですか？」と尋ねましたところ、「あれはリュウキュウアサガオというものです。」とお知らせいただきました。小生、図鑑も持っておらず、研究もしておりませんのでそれ以上のことはわかりません。



リュウキュウアサガオ

2) 皆様よくご存知のトランペット型の花がたくさん咲いていました。決して珍しいものではありませんが、ユリ状の白でしょうか、うす桃でしょうか。この花が下をむいて咲いています。小生、これまた図鑑、その他で研究したことはありませんが面白い花ですね。



3) もうそろそろ季節だと思いますが、ユウガオがたくさん咲いていることと思います。小生老人のため、咲いているところを見たいとは思いますが、眼も悪く夕方以降の外出が出来ません。

4) 小生宅のハマゴウも庭の中で大変繁茂はんもしております。紫の小さな花をつけています。

5) 今年の春、鹿児島県屋久島のソテツの種(大きなもの)を2個もらいました。2階建て位の高さに生長すると聞いています。芽が出ると良いのですが。

(中海岸 星野利行)

## シラカバの樹液

シラカバは、詩情あふれる樹木である。また、この木は美智子皇后の御印の木にもなっている。湘南地方でも、植栽されたものを時たま見かけることがある。

樹液を利用する研究では、カナダのメープル（カエデ）からシロップを製造する利用法が有名であるが、最近北海道でシラカバの仲間から樹液を採集する研究が進み、すでに商品化されている。

シラカバは、春芽ぶきの頃に1ヶ月にわたり樹液を出し、葉が出ると止まってしまうという。採集の方法は、樹木の根元近くに人差し指程度の穴をあけて、チューブを差し込んでドラム缶に集める。24時間で5リットルも採集できるという。

樹液の主成分は、99.3%は水分であるが、その他にブドウ糖、果糖、カルシウム、カリウムをはじめとしてマグネシウム、リン、鉄、亜鉛など身体に必要な各種ミネラルが含まれている。この樹液をすでに利用している国々は、ロシア、フィンランド、中国、韓国など8ヶ国に及ぶ。それらの国で伝承されている効能は、胃腸病、便秘、痛風、リウマチ等であるが、特に優れているのが利尿作用という事である。

この樹液は、我国では食品に多く利用されている。ワイン造りの水、ビール造りの水、コーヒー、お茶、うどん、パン、アイスクリーム等に利用され、その他化粧品やシャンプー等にも使われているという。

最後に、戦時中、南満州鉄道株式会社中央試験所有機化学課繊維研究室の田豊鎮氏が、満州産シラカバからパルプを製造する研究を続けておられた。氏は大阪帝国大学工学部応用化学科を卒業した韓国人の方であった。その研究結果は、工業化学雑誌に発表されている。

『茅ヶ崎自然の新聞6月号（272号）』に、松風台の山崎孝弥さんが、「樹液のツララ」という文章を寄せておられた。この文章に影響を受け「シラカバの樹液」を記事にする次第です。尚この文章を書くにあたり、横浜植物会の中尾真弓さんに資料のパンフレットを頂きました。

（藤沢市藤が岡 小原 敬）

## トウモロコシ三題

- 1) 火事の後に、時々赤いカビが生えている事がある。アカパンカビ（子の菌類）である。太平洋戦争が始まった頃、満州国の中央博物館の会報に菌類学者小林義雄先生が、フィリピンではトウモロコシにアカパンカビを生やしたものをオムンジョンと言って、食用に供していると報告されていた。
- 2) 最近マスコミは、メキシコで「トウモロコシのお化け」（くろぼ病菌が寄生し肥大化したもの）を食用に供していると報道していた。一種独特の臭いがするが、健全な物に比べて高価であるという。日本では、マコモの幼穂に黒穂菌（担子菌類）が寄生した物を食用としている。
- 3) 筆者は、旅順中学校を卒業した後、南満州鉄道株式会社中央試験所（大蓮）に就職した。その時の農産化学課長の六所文三氏は、郷里の富士山麓のトウモロコシから採取したアセトン・ブタノール菌の研究をされていた。終戦後、中京の化学工業局はこの研究に注目して、上海の大学を出た化学者も中央試験所に派遣し、この研究を学ばせた。彼は非常に温厚で真面目な学者タイプの人物であった。アセトンは、綿花薬の溶剤などに用いられる。現在では発酵法ではなく、化学的に合成されている。

（藤沢市藤が岡 小原 敬）

## お知らせ

- 「茅ヶ崎自然に親しむ会」  
『厚木・広沢寺周辺の高揚を楽しむ』  
日時：12月17日(日)  
問い合わせは、  
安井利子(52-3856)まで
- 「清水谷を愛する会」  
日時：1月21日(日)  
9時30分～15時  
集合場所：市民の森駐車場(堤)  
問い合わせは、  
田部許子(51-2955)まで
- 「柳谷の自然に学ぶ会」  
『冬の谷戸をみよう』  
日時：12月10日(日)  
9時30分～14時  
『冬鳥を見よう』  
日時：1月28日(日)  
9時30分～14時  
集合場所：小出支所  
問い合わせは、  
野田晴美(51-8489)まで
- 「駒寄川水と緑と風の会」  
『駒寄川上流』  
日時：12月3日(日)  
13時30分  
集合：民俗資料館(旧和田家)  
問い合わせは、  
池田尚子(52-8919)まで
- 「三翠会」  
三翠会では、市内の川や水辺の生きもの調査やタゲリをはじめとする野鳥観察、お米(タゲリ米)づくりのお手伝いなどに取り組んでいます。ご協力いただける方は、下記までご連絡下さい。  
事務局：河村まき子(87-8313)

## 記事募集!

「自然の新聞で」は、みなさまからの投稿お待ちしております。メール、FAX、手紙でOKです。

FAX：0467-85-1733

メールアドレス：

shiryokan@city.chigasaki.kanagawa.jp

★次号の原稿の締め切りは、2007年1月5日(金)までをお願いいたします。

## 特別展

### 「ちがさきの野鳥」を開催!!

平成18年度の文化資料館特別展は、「ちがさきの野鳥」をテーマに、文化資料館で3年間行った市内野鳥調査の結果や、市内に生息する野鳥たちのくらしや生態を、模型や写真、標本などで紹介いたします。

また会期中には、野鳥観察会などのイベントや講演会を予定しておりますので、ご期待ください。詳細な情報は次号でお知らせいたします。

会期：2007年2月2日(金)

～2月25日(日)

場所：茅ヶ崎市文化資料館1階展示室

イベント：冬の野鳥観察会(2/17)

講演会：「湘南の野鳥」(予定)(2/18)

浜口哲一(平塚市博物館館長)



シジュウカラ